

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日 運輸省特刊表紙承認 第六二七号
明治三十一年十月十日第三種郵便物認可 毎月一回一日発行
平成十八年四月一日 発行 全第百九卷 第四号

ホトトギス

四月号



俳句随想

汀子

一九九八年一月号の総合俳誌「俳句研究」に始まった「虚子百句」は八年と四カ月の歳月を経て二〇〇六年四月号を以て完成する。

毎月、虚子の一句に対して千三百字の文章を書くのは大変な仕事であった。書き易い句を始めの方に選んでしまつて、もつと年代順に計画を緻密に立てればよかつたと、それに気がついて計画を立て直した。様々はデータ、その背景等々調べて頂いたI氏の協力は有難かつた。またこれまで色々な方々が書いて来られた資料も参考になつた。私が身内として知っていることを独断と偏見で書いたこともある。私しか書けないことを書きたいと思つて自分の考えを駆使した。段々人々が取り上げている句が無くなつて来て、むつかしい句が残つた。しかし、それらは誠に勉強になり虚子の事をより深く知ることとなつた。

「俳句研究」四月号で特集を組んで下さるそうだ。稲岡長さん、長山あやさんと私で鼎談をする。長山あやさんは「虚子百句」の英訳をして下さっている。芭蕉しか知らないアメリカ人に虚子を知って貰いたいのである。

現代に生きてゐる俳句を世界に広めたいと願つてゐる。

旬日記

汀子

平成十七年四月一日 工業倶楽部

風に耐へ来しほど傾ぎ花ミモザ日永てふ旅に油断のありにけり利休忌の松風になと包まるる

四月二日 芦屋ホトギス会

招じたり咲き継ぐ春の過ぎ易くかうはしてをれぬ刻々とて長閑初花はまだかと問うて旅予約

四月三日 関西野分会

戸締りは早目に一人春の暮祝衣にも迷ひあり別れ霜上京の日も近づきぬ春の暮魁けてぬしは薄墨初桜もたらせし鉢春の野の一部分

四月三日 下萌句会

日歸りの旅のどけしや氣忙しや朝寝して取り戻したる意欲かなその辺で摘みしと都忘れ活け花冷の朝頃の時間となりゆかん

四月四日 ロイヤル俳壇

志継ぎゆく花の忌日かな花の坂携へて来し祝ぎ心皆今日の花の喜び持ち寄りて

四月八日 毎日新聞「桜競詠」

かく晴れて虚子忌日和といふはこれ花日と虚子の心といふべかり祝ぎごころ携へて来し虚子忌かな

四月八日 虚子忌

沈丁花その存在を闇に置くみよしの花の消息間はずともふと力抜きたる如く春の雨へば又かかたる春宵の祝ぎ心

四月十二日 大阪倶楽部

祝ぎ心沈めたるより花の雨暖かそめし心通ひて祝ぎの旅あたたかき会となりたることを先づ

四月十三日 綿業倶楽部

花移りゆくみ吉野の晴に向けふらしここに子育ての日々ありしこと

四月十四日 清交社

花の旅まですませて置くことも花の旅また花の絵巻を繙かん

四月十六日 吉野山くつろぎ

花の灯を包みて花の朧かな大きくて氣になる春の星明り

第四句会

朝の日の花の屋根より下りてくる朝の日の揺らし花影伸びて来し

四月十七日 吉野山くつろぎ

朝の温泉に音を重ねて春惜む鶯に 温氣漲りはじめけり

第四句会

散り初めしその一片の花明りみ吉野の花にも手作り花の宿

四月十九日 有恒倶楽部

花辛夷白に光をとり込めり山肌孤高の白は辛夷かな

四月十九日

風光るとき水光り空光り

春眠を払ひたるより運転すぐ次の予約を入れて花の宿

四月十九日 無名会

春眠の光まどひて来りけり星朧方角定かならざりし

四月二十日 夏潮句会

咲きこらへられず牡丹の雨に散る黄桜に雨上りゆく光かな

四月二十一日 祝 小川石輪様

えにしとは百年を経し春の風

四月二十二日 時雨会

数だけは揃へて置きぬ桜餅み吉野の旅はつみて旅のこと

四月二十三日 句会と講演の会

柳絮の名はアブナクトルス旅朧わが庭を周知の如く鳥交る

四月二十五日 野分会

植込の一画にして別れ霜アメリカへ帰る娘と春の暮

四月二十八日 きざらぎ会

これより花に浮かるる山路かな花の山旅の名残は尽きざりし

四月三十日 東海ホトギス同人会

由緒ある花に出逢ふも旅路かな旅路なる花彩りみたりけり惜春の心伊賀路へ向かひけり伊賀越の山路彩る遅桜軽暖の明る山城下街の着餅結局は鍵屋の辻の蔵餅

廣太郎句帳

廣太郎

四月十六、十七日 吉野くつるぎの旅

ゆらゆらと弥生の空でありにけり

祝ぎ心吉野の花に会へば又
みよし野や風と残花の聞き合ひ
祝ぎ疲花疲にはあらざりし
ベネデイクト十六世に沸く弥生

四月二十三日 ホトトギス社句会

若女将健在吉野花健在

夕桜夜桜となる身拵へ
森揺さ振りてゆさぶりて鳥交る
筍の初物といふ甘さかな
四月二十六日 若水会

多歌司氏はダイエツト中亀鳴けり
色濃きは吉野の贅や桜餅

平成十七年四月七日 蕉心会

風光るとき君の唇そこに
ふらここを漕いで地球を一寸離れ

下町の花の輪廻でありにけり

青丹吉奈良の外れの花万朶
一人とは孤独にあらず臙影

蝌蚪を見る少女のやうな瞳かな

若女将てふ来年を約す花
兄弟の足ちぐはぐに半仙戯

四月十九日 草木瓜会

四月二十七日 目黒学園句会

花の下蕉心会の六年目

丸の内ゴーストタウンめく臙
満開の花に覚めれば吉野かな

四月九日 ホトトギス巻二百号記念当日句

臙より現れ臙へと消ゆる君
若草に水微笑んでをりにけり

この花に寄す忌心と祝ぎ心

コンクラーベ未だ決らず鐘臙
若草に牛の尾撥ねてをりにけり

四月十一日 朝日カルチャー 若草俳句会

臙夜の動きさうなる吉野杉
燭灯すとき花明り花の闇

夜桜に闇の眩きありにけり

一片の落花羽音に離れゆく
花の旅地球の自転確かめて

散り敷ける落花に都心鎮もれり

これよりは単線に入り葱坊主
春惜み翁を偲ぶ縁かな

四月十四日 土筆会

石鹼玉青き地球を包みたる
鐘臙新法王はドイツ人

風向に従はざるも落花かな

初夏を諾ふ伊賀の風情かな

四月二十一日 登高会

雑詠

廣太郎 選

浜離宮雪吊最中なりし日に 福岡 松尾緑富
 雪吊のゆるがせならぬ縄加減 同
 雪吊の離宮の松に足とどめ 同
 水平線揺るがせ三浦大根抜く 東京 内藤呈念
 店裏のやくわん沸騰酉の市 同
 掘り出され泥鰯の夢の覆る 同
 若狭湾日がな音なし時雨来し 樞原 稲岡 長
 若狭富士暗みしよりの時雨癖 同
 落葉して黄金浄土地に拡げ 同
 門前の構へ変らぬ町小春 吹田 宮崎 正
 冬木立しじま深めし明烏 同
 新雪の一步が軋む夜の帰路 同
 短日や北国降ればなほのこと 長岡 安原 葉
 更けし夜の北国時雨つのる宿 同
 一天の日や足ばやの時雨雲 同
 俳諧の忌日も濟みて冬に入る 東京 吉田小幸
 慶事待つ皇居の森や冬紅葉 同
 初冬や溜めて物憂し針仕事 同

絨毯に躓いて冬来てをりぬ 神戸 山田弘子
 美穂女逝き神農祭も疎遠なる 同
 ひと時雨ありし芦屋の松並木 同
 落葉にもさくらの香りほのとあり 同
 枯れながら風とひとつになる芒 同
 初霜や星屑ほどのかそけさに 同
 ひかりとぶ露の空ありマリア像 函館 阿部慧月
 天高しベルナデッタは跪き 同
 廻らざる花時計見て秋の暮 同
 雨の日の石路明りして我が山廬 姫路 桑田青虎
 わが庵は庭の隅まで石路明り 同
 籠居に旅を恋ふ日々冬に入る 同
 天井は星空なりし酉の市 熱海 嶋田一步
 天麩羅を食べてが慣らひ酉の市 同
 熊手買ふ一杯機嫌で来るものか 同
 アシメトリカル好きマフラー巻くときも 同
 パンジーは何時も盛りや黄紫 同
 客通すいまの上席縁小春 同
 書写に忌を重ねて年尾偲ぶ秋 姫路 蔭山一舟
 年尾師を偲びし書写の秋時雨 同
 秋深みゆく年尾句碑青虎句碑 同
 一つづゝ五蘊の消えてゆく寒さ 佐賀 池田風比古
 草もみぢ踏んで郷土の史を正す 同
 山茶花の枝より土に白かりし 同

雑詠句評（三月号より）

千鶴子・忠彦・憲明
むつみ・中正・静龍
明倫・葉美奇
保佳・芳子・廣太郎

鷹渡る山はうち伏し海は凧ぎ 高知 橋田憲明

徳島の上崎暮潮氏に誘って頂いて、鷹の渡るのを見た。徳島は通り道なのだそうで、毎日渡りが見られる。長い間憧れていたものでそれは感動的であった。遠い遠い空の彼方を、自分の思うままに渡って行く鷹は孤高で、美しかった。土佐は通り道ではなく、或る山から鷹が飛び立つという。その予報が毎日発表されるという。作者は鷹の渡って行く一部始終を見たのだろう。そうして、「山はうち伏し海は凧ぎ」と感じたのだろう。自然も人間も渡って行く鷹を見送り、その旅路安かれと祈る、その気持が窺われる。（千鶴子）

筆者は鷹の姿は何度か見た事があるが、それが渡って来ているところかどうかは定かではない。最近では渡ってくる鷹も少なく、

この句のような情景を見る事も少なくなったと聞く。それだけにこの貴重な瞬間が作者の目の前の迫力となって迫ってきた。重厚な表現の句である。（廣太郎）

身に入むや被災一年瞬く間 長岡 安原 葉

ニュース、新聞などで知られたのか、御自分または身内の方が遭われたのでしょうか、他人事でない自分の心、身体が嘆き悲しみ苦しんでいたのが、ふと考えてみれば、もう一年も経ったのか、瞬くほど極めて短い間に、過ぎてしまったという句であろうか、明日は我が身がつまされる思いだ。（忠彦）

平成十六年十月二十三日、丁度この日東京では「ホトトギス社吟行会」が行われていて、会後、東京都心でも激しい地震を感じたが、震源は新潟県であり、作者も地元で被災された方々のお一人なのである。しみじみと季節に心情を託して、その時の事を思い出されているのである。（廣太郎）

（以下略）

天地有情

江子選

露の空渡り来し月濡れてをり 相模原 木村享史
 露の散る天地有情とはこれか 同
 もつと白でありたしポインセチアの白 吹田 大橋敦子
 しんしんと野のもの枯れてゆく夜なり 同
 一僧も紛れゆくなり酉の市 長岡 安原 葉
 江戸つ子になりし一とき酉の市 同
 寒々と漱石旧居 豊の間 東京 今井千鶴子
 石路咲ける漱石旧居物語 同
 煩惱も我執も薄れ冬霞 豊中 瀧 青佳
 老の底窮むるほどに露けしや 同
 日の当りつつ雪雲のひろごりぬ 明石 中杉隆世
 荒海に突きささる日矢ちやんちやんこ 同
 上方の俳諧和事金屏に たつの 浅井青陽子
 すすきゆれ法の御山の秋深む 同
 一慶事終りしよりの冬めける 姫路 桑田青虎
 石路日和日射しに酔ふといふことも 同
 木枯の荒れたる朝の森晴るる 榎原 稲岡 長
 せりせりと薄刃積みゆく霜柱 同

白菊やここに座りし人のこと 東京 稲畑廣太郎
 悌はこの白萩の下でこそ 同
 浜離宮鴨連戻り来る日暮 福岡 松尾緑富
 夕べには増え来離宮の鴨池に 同
 勅使門入りてしづかな師走かな 東京 坊城俊樹
 刀自の梁ごつごつ霜の夜を支へ 同
 山脈のかたちは秋風のかたち 熊本 岩岡中正
 天高し一步に一句生まれさう 同
 短日を連れて夕日の沈みゆく 神戸 長山あや
 雪といふ星の宇宙の便りかな 同
 木枯や森の木霊をふるはせて 宝塚 水田むつみ
 花八手月日静かに顧みる 同
 洛中の賑うてをり夕時雨 東京 荒川ともゑ
 沼の面の翳り俄かにしぐれきし 同
 少年も加はつてをりとぜう掘り 同
 どかと着く京大根の重さかな 同
 しぐれつつ一つ大きく燃ゆる星 神戸 山田弘子
 霜除の麻縄の黒竹の青 同

天地有情句評

汀子

寒々と漱石旧居畳の間 東京 今井千鶴子

明治の生きざまを知る作者。

煩惱も我執も薄れ冬霞 豊中 瀧 青佳

全てを諾う心となつて行く達人の境地。

日の当りつつ雪雲のひろごりぬ 明石 中杉隆世

雪雲と太陽。

すすきゆれ法の御山の秋深む たつの 浅井青陽子

法の御山の深秋の自然。

一慶事終りしよりの冬めける 姫路 桑田青虎

厳しい冬に対して行く決意。(以下略)

露の散る天地有情とはこれか 相模原 木村享史

虫や草木の生命の糧である露が散る秋。天地有情である。

しんしんと野のもの枯れてゆく夜なり 吹田 大橋敦子

身近のしんしんと迫りくる野の冬の枯れる気配を感じる夜。

江戸っ子になりし一とき酉の市 長岡 安原 葉

江戸っ子の気風に紛れて行く酉の市。